

「児童の世紀」を振り返る

——その二——

本田 和子

科学の時代とその「落とし子」

よい結婚がよい生殖行為に連なり、その所産として生み出される「良質な子ども」こそが、来るべき世紀の希望である。そのために、結婚の法的根拠は

意味を持たず、法律的には未婚者であっても、優れた子どもを出産し、育成し得る母体の機能こそが活用されるべきである。一九世紀の女権運動や婦人労働運動を批判し、「母性保護」を強調したエレン・ケイの主張は、こう要約されるとき、消極的優生学と

積極的優生学の混合体であると気付かされよう。すなわち、結婚制限や断種による人種改良へと展開する消極的優生学と、望ましい遺伝子同士の結合を奨励する積極的優生学が、彼女の中で矛盾なく結合し、楽天的とも言える独得の生殖観・結婚観、そして出産観、延いては子ども観を出現させているのである。

エレン・ケイの依拠した「優生学」が、社会ダーウィニズムの申し子であることは言を待たない。先にも触れたように、一八五九年暮れに出版された『種の起源』は、キリスト教への帰依によって成り立っていた安定した意味世界に亀裂を生じさせ、従来の倫理の基盤や人生の指針、あるいは日常の細々した規範などを崩壊させる危険な引き金として機能した。その結果、新しい規範として登場したのが、人間社会を自然科学的に解釈しようとする哲学的傾向であり、とりわけ、ダーウィンの原理をとおして

理解しようとする「社会ダーウィニズム」だった。

一九世紀末から今世紀初頭にかけて欧米社会に流行した社会ダーウィニズム、それが意味するのは、当時の人々が、人として生きて

いくために新しい意味空間を必要としたこと、および、揺らぎ出した宗教的基盤や生活規範に代わって、それを打破した自然科学こそが、合理的で確実な新しい生き方の根拠と見えたであろうと言うことだ。エレン・ケイは、いとも明瞭にこのことを宣言している。「先ず考えなければならぬことは、自然科学をもって教育学の基礎とせねばならないと同時に、またそれは法理学の基礎ともしなければならぬということである」と……。とすれば、「優生学」は、生殖・妊娠・出産などの人間古来の行為



が、新しい科学主義的意味空間のなかに置かれたとき、それを語り変える新しい言葉だったと言うことになる。

「子どもを生む」という行為は、既に死語と化した「授かる」に代わって、現在は「作る」という言葉で語られていると言う。今世紀も終わりに近付いた今日、「優生学」は死語と化したとまでは言わぬものの、かつてのような社会的地位からは追われている。ナチス・ドイツの異民族迫害の理論的根拠とされたという歴史もあって、それは、科学であるにまして忌むべきイデオロギーと解され、追放の憂き目を免れ得なかつたのであろう。

しかし、にもかかわらず、子どもを「作る」と捉える現代人の感覚は、優生学的観念と深い水脈を共有する。なぜなら、それは、妊娠や出産を、そして、生まれてくる小さい生命の誕生を、創造主の業とは無縁の人の力によるものとする人間中心の世界

観の反映であり、子どもの誕生を人為的操作の所産と見る点で、優生学的生殖観と同列にならぶからである。優生学も社会ダーウィニズムも、今世紀の王座に着いた「自然科学主義」の産物であってみれば、「子どもを作る」と把握する現代人の感覚は、明らかに科学の時代の申し子である。おおよそ一〇〇年の歳月をかけて、子どもに対する私どもの感じ方は、その根っここのところでどっぷりと科学の色に染め付けられてしまったのである。

それに、「子ども」は、いま、試験官で「作られる」ものとなりつつあって、人知を越えるかに見える生命誕生の神秘は、科学という無影灯のもとにその全貌をあらわにしようとしている。自然科学を神の座に据えた今世紀は、それを象徴する行為として、「子ども」の生命そのものまでを、「科学」という絶対者の操作に委ね始めたと言うべきかも知れない。

「永遠の子ども」

——科学の時代の鬼っ子——の発見

科学の時代は、しかし、一方で奇妙な「子ども」

を産出してゐる。経過する時間に抗し、進化の個体版たる「成長」とも無縁に、いつまでも「子ども」のまま」で、続ける不思議な存在の創出がそれである。たとえば、今世紀幕開きの一九〇二年に、イギリスで産声を上げた「ピーターパン」もその一人であつた。

ロンドンのケンジントン公園のクリスマス劇の会場で、不思議な光景が出現していた。舞台上のピーターパン役の俳優が、やおら進み出て観客に呼びかけたのである。「あなた方は妖精を信じますか？あなた方が信じるなら、彼らは生き延びることが出来るのです」このとき客席から起こつたのは、いっせいの拍手であつた。一人二人と観客が立ち上がる。

そして、彼らは叫んだので

あつた。「信じるぞ、信じ

るとも」……。しかも、立

ち上がった観客の多くは、

既に子どもではなく、一人

前の立派な紳士たちだつた

と言うのである。

このエピソードに関して、私には、その真偽を確かめる根拠がない。しかし、仮にフィクションにしても、こうした伝説が、真しやかに語り伝えられたところに、今世紀の隠された願望を読むことが出来る。すなわち、それは、科学が追放した「妖精」や「魔術師」など、伝統的なものろもの不思議な子どもの世界に温存し、それを「信じる」という形で自身の内側に貯えこもうとする新しい心性であつた。

ピーターパンが、ジェームズ・バリと呼ばれる作



家の筆から生み出された、物語の主人公であることは周知であろう。彼ピーターは、赤ん坊のときに鳥のように窓から飛び出し、「ネバーランド」という「どこにもない国」に住み着いて、「永遠の子ども」としての生を送る存在であった。流れ去らない時間のなかで、地図上のどこにも特定されない場所に住む……。彼は、まさしく「時計」と「地図」に支配される近代社会に対して、「ノン」を突き付けたのである。

日常的現実とは異なる「もう一つの世界」を意図的に産出し、そこに、日常的理性の否定した様々な現象を生起させる。こうした物語を、今世紀は「ファンタジー」と類型化して、児童文学の中心においた。そして、伝統的世界に跳梁した魔法の力、あえて言えば、「非科学的」あるいは「反科学的」の名の下に科学の時代が追放・抹殺を企てたものもろを、そのなかに封じ込めたのである。ファンタ

ジー・ランドでは、悪戯者の妖精や優しい仙女が活躍し、もの言う獣や小鳥たち、あるいは空を飛ぶ船など、ありとあらゆる不思議に生存権が与えられ、その健在ぶりが主張されたのである。

以後、今世紀のファンタジーは、多くの魅力的な主人公を生みだしてきた。なかでも、サン・テ・グジュペリの『星の王子さま』やエンデの『モモ』など、子ども読者にもまして多くの若者たち、大人たちに愛読された作品も少なくない。象を丸呑みにしたうわばみの絵を、素早く見破った星の王子さまは永遠の子どもの心の持ち主であったし、百年の余もこの世に生存したらしいのに、もじゃもじゃ頭で十歳くらいにしか見えないモモは、永遠の少女であった。星の王子さまの鈴を振るような笑い声は、作品中の飛行士を癒しただけでなく、本を手にした多くの大人読者を癒した。モモの活躍が、現代の救世主物語として読まれたことは、いまだ、私たちの記憶

に新しい。科学を中心に仰いだ今世紀のまなざしは、こうした「永遠の子ども」たちに対して、一方ならぬ熱い視線を注いだのであった。

もう子どもではない人々が、成長と無縁の主人公たちの生き方に満腔の賛意を表す。このことが物語るのは、経過する時間のなかでいやおうなしに年齢を重ね、生物的存在としての自己身体の滅亡へと究極的な歩みを急がされる人々が、老いることも死ぬこともない理想境を、自身の内部に設定しようとする無意識の希求ではないか。トーマス・モールトは、その「ピーター・パン評」において次のように語っていた。すなわち、ジェームス・バリにとっての芸術とは、「逃げ出したくなったり、遠くに行ってしまうとき、またあの最高の羨望の的たる永遠の青春、「不老不死の国」に行きたいときに、いつでも、われわれ人間の目の閉ざされた窓を……こうして……開いてみせることである」と……。科学

に支配された産業主義の時代に、それらから隔離された安らぎの故郷を内側の世界に求める。永遠の子ども主人公やその活躍の場の創造、こうした営みの意味するものは、「懐古趣味と逃避以外の何ものでもない」という、ピーター・パンや星の王子さまを巡るこうした酷評も、ある一面を指摘し得ていると評価されてしかるべきかも知れない。

「子ども」に関する巨人たちの言説

優生学的に操作され理想の人類へと改良の歩を進める子どもが外部に想定されたとき、進歩や成熟を拒否した永遠の子どもが内部に発見される。二〇世紀とは、小さい人たちの上に、こうしたアンビバレ



ントな徴付けを試みた時代であった。

ところで、こうした彼らのありようをめぐる、

それを、刺激的な言葉で位置付けようと試みた巨人たちが既に出現していた。前者、すなわち、子どもに人類の理想を見る代表的な一人として、エレン・ケイも傾倒していたニーチェを上げることが出来る。

ゴルトンの「優生学」に全面的に依拠した彼女は、同様の思想の所有者として、ニーチェに言及する。たとえば次のように……。「ニーチェがその〔超人〕の思想の根拠を直接ダーウィンにおいていたというのではないが、またダーウィン自身そのような思想を予期していたというのではないが、なおしかしニーチェの思想はダーウィンの思想の一大結果たるを失わない。ニーチェほど強烈に、現在の人類は単に動物と〔超人〕との間をつなぐ橋梁に過ぎないのだと確信したものはない。そこからニーチェ

は、人種改善に対する人類の義務をば、ゴルトンに劣らず極めて厳粛なものと見た。ただ彼は、この主張を表白する科学的証明をもってしないで、詩的表白、予言的表白の力をもってしたのである」。

そして、エレン・ケイは、両親に関する真の予言的・詩的言説として、ニーチェの次の言葉を引くのである。

「汝の真の勝利もまた汝の解放もすべて子供のために求められるものであることを余は希望する。汝の勝利のために汝の解放のために汝は生きた記念碑を建てねばならぬ。

汝は汝自身よりも更に高く、高く高く、建てねばならぬ。されど余は、汝の先ず汝自身を正しき基礎正しき心身にまで作らんことを望む。

見よ、汝自身とおして人類の進歩するのを、単に継続するのではなく進歩するのを。

真の結婚をしてこの目的に進む汝の補助たらしめ

よ。

汝は汝よりも一層高揚せる人類を造らねばならぬ。自ら廻る車輪の如く自発力を有する人類を造らねばならぬ。創造の活力そのものを汝は造らねばならぬ。」

この引用文は、いま生きる自分を超えて高く建てられる生きた記念碑が子どもである、と、高らかに謳い上げていて、彼女の魂を震わせたであろうことが推察される。確かに、ディオニュソスの美と力を価値の源泉に求めたニーチェは、「児童の世紀」の出現を側面から推進した思想家として、光を当て直すことが可能であろう。

ニーチェは、しかし、「児童の世紀」の展開を見ることなく、一九〇〇年に薨じた。その同じ年に、大著『夢判断』を世に送り、さらに一九〇五年の『性欲論三篇』によって、幼児期体験に分析の光りを当てその意味を強調して、人の生涯における「乳

幼児期」の位置付けを明確

化したのが、他ならぬG・

フロイトであった。彼の

「幼児性欲とその段階的発

達論」に、一九世紀末を震

撼させた進化論の影響を見

ることは容易である。より

ストレートに、進化論的発想を下敷きにして構築さ

れた人格発達の理論と読むことも可能だろうか。臨

床医として小児の症例と直面し、小児神経病学の第

一人者と称された彼が、その症例論の集大成に際し

てその基盤に進化論を据えたことは、どのような巨

人と言えども、時代の知的パラダイムから無縁では

あり得ないことを示唆している。

ところで、フロイトの提唱した意識下の幼児体験

とは、もう子どもではない人々の内部に「子ども」

の存在を指摘する言説でもあった。自分の内側に子



どもだった自分が住んでいて、それが、さまざまに悪戯をし、現在大人である自分に相応しからぬ言動を強いる。フロイト理論を単純化してこう解釈するなら、それは、文学や芸術の世界に跳梁し始めた「永遠の子ども」たちとある種の親和関係を結び始める。すなわち、内に住み着いた「子ども」は「永遠に子どもの」であり続け、大人との間に強い違和感を表明し異義申し立てをし続けるらしい。そして、作品の主人公たちは、「内なる子ども」に忠実に、成熟を拒否し大人などという厄介なものになることを回避した人物とすることになろう。ピーターパンも星の王子さまも、あるいはその他の誰それも、すべて「内なる子ども」の求めのままに、大人になることを止めて子どものままに生きることを選んだのだ。

したがって、精神分析学者たちがこれら物語を評するとき、大方が批判的、時に酷評的ですからあつ

て、その作者に対しては、さながら小児神経症例に對するような人格分析が行われる。しかし、クリスマス劇で大人の観客が拍手を惜しまなかったこと、また、『星の王子さま』に熱い涙を注ぐ若者の存在がいまだに後を断たないことは、今世紀が発見した「内なる子ども」の存在が、依然、無視し得ぬものであると告げているように思われる。

(聖学院大学)